

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：17104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370861

研究課題名(和文) インド植民都市社会史の史料研究：イギリス東インド会社期から植民地統治期への接続

研究課題名(英文) Social History of the Towns in India established by the English East India Company: Historical Sources

研究代表者

水井 万里子 (MARIKO, MIZUI)

九州工業大学・教養教育院・教授

研究者番号：90336090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の研究成果として、研究課題の柱である植民都市社会の女性の実証研究を実施し2冊の論文集を出版した。ここで、17世紀後半から18世紀半ば以前までの「商業」の時代と認識される次期に、居留地を中心として展開した会社の植民都市建設事業を会社史料から実証検討した結果、女性植民事業に会社が果たした役割と理想をもとにした計画が明らかとなった。19世紀半ば以降のイギリス帝国期のインド都市社会との接合・変容の状況を長期の時間軸で分析するため、領主としての東インド会社の植民地統治、さらに植民エージェントの役割を史料から明らかにし、帝国形成のプロセスに焦点をあてた議論を展開した。

研究成果の概要(英文)：This research project explored the towns in India which originally established by the English East India Company. As the women in those towns are the key of this project, two books were published during the 3 years' period. In these books, the issue that the East India Company acted as the manor lord for those towns had the clear plan for the emigration of women from Britain is argued. As the result of the argument, it appears that it is important to relate the Company's role and its plan to those of the British colonial government in the later period. This may also be able to make it clear the process of constructing the British Empire.

研究分野：西洋史

キーワード：インド植民都市 東インド会社 女性 社会史 史料研究

1. 研究開始当初の背景

(1)

本研究ではイギリス東インド会社が管区として統括するインドの諸植民都市社会が、同会社によってどのように法や規制を適用され、変容を遂げていくのか、その実践過程を実証するための史料研究を基礎的な研究課題とした。東インド会社管区期からの植民都市社会の起源・継続性・変容についての実証的な研究から、上述のような帝国期の植民都市社会史研究の諸議論との接合を試みることは大きな課題となってきた。インド亜大陸における都市、カルカッタ、ボンベイ、マドラスの歴史研究は、イギリス東インド会社による会社管区(植民都市)期と、イギリスによる植民地支配下の帝国都市という異なる二つの視角から進められてきたのである。これらの都市における様々な社会史的事例は帝国期における「支配と従属」という枠組で論じられ、先行する東インド会社期においてさえ「白人対現地住民」「文明対未開」といった単純な二分法によって解釈され歴史が叙述されることが多かった。

(2)

帝国期における都市の史的状況は、プランテーションの社会とあわせて「イギリス帝国の植民地社会史」として解釈されがちである。しかし、植民都市の場合は19世紀後半に入っても相対的に少数の白人人口とそれを取りまく多数の現地住民が「都市」という限られた空間に、住み分けがあったにせよ共生していた。「植民都市」という空間が、無批判に「植民地」という広大な領土の問題として語られることに課題があるといえ、植民都市の起源であるイギリスやオランダ東インド会社による都市建設と統治、都市固有の社会を会社史料から実証した歴史的アプローチは多く見られない。

(3)

本研究においては、17 - 18世紀の東インド会社期のインド植民都市社会と帝国期の社会がどのように接合し変容していくのか長期の時間軸において実証する基盤を構築する。このための課題の一つが、対象とする史料の質・所在の変遷である。先行の科研萌芽研究では、イギリス東インド会社史料、19世紀イギリスのインド植民地の政庁関連史料、オランダ東インド会社史料の所在、内容、特徴について研究会や諸文書館での協働的アプローチを通じて共有しながら、史料的な接合の問題に取り組んできた。今回もこの方法を使いながら、史料を基盤とする社会史の実証可能性を、法制度史、教育史、ジェンダー史の理論や方法を参照しつつ実証研究も実施する。具体的には、「教育」「法制度」「セクシュアリティ」といった研究課題の鍵となる 이슈が、17世紀から19世紀末までの植民都市社会の中で変容する場合、どのような史料を用いて通史的に実証していくべきなのか、その方法を史料研究として提示する

ことが必要と判断することとなった。

2. 研究の目的

インド亜大陸におけるイギリスの植民都市(以下インド植民都市)に関する、社会史の実証研究の基盤となる史料研究と実証手法の確立を目的とする。植民地社会の公共圏の外の親密圏やその境界領域に存在が見出せるような女性やこども若者のあり方を史料から実証的に明らかにするため、植民都市社会史研究に必要な史料についての研究基盤を構築する。植民都市内部で生まれ展開する社会的関係性の諸相である人種主義・民族主義、ジェンダーという問題群を見据え、その起源と変容を長期的に明らかにするため、東インド会社時代の史料群と帝国期の史料群から同一の社会的課題の実証的可視化に必要な、異なる特徴を持つ史料の接合と実証方法を提示する。

3. 研究の方法

(1)

研究代表者と研究分担者がマイクロフィルムで所有するイギリス東インド会社商館史料群(役員会議事録、本社関連往復書簡)をデータ化しつつ読解を進め、ここから17-19世紀末までの植民都市「ボンベイ、カルカッタ、プリカッタ、マドラス」の社会についての情報を抽出する。これをもとに、英蘭文書館所蔵の私文書群を付加的に調査し、植民都市の親密圏や社会史課題の事例を抽出する。

(2)

研究分担者は植民地における親密圏についての史料研究を現地調査を通して実施する。両時期の史料利用の接合を図るため年に3回の研究会とデータ化した史料情報をもとに史料分析を進め、史料研究の背景に必要なインド洋世界史、英蘭東インド会社史、前近代インド史、イギリス帝国史、オランダ帝国史の二次文献から知見を得て、成果を論文集として複数冊、及び学術誌に論文で発表する。

4. 研究成果

(1)

17世紀後半から19世紀半ばの東インド会社管区史料(ボンベイ、カルカッタ)および帝国期のボンベイとカルカッタの職業や教育、言語の問題を社会史的に調査した。これらはイギリスのBritish LibraryとOxford大学、インド諸文書館に所蔵されているものである。本研究のメンバーは越境する史料を発見するために、できる限り各人の史料調査の結果得られた史料の特性について電子化した史料を共有し意見交換をした。特にBritish Libraryにおける史料調査ではコピーや写真撮影ができないことが多く、史料をマイクロフィルムで収集した。また、採択期間の最後に、これまで許可されていなかった上記のBritish Library所蔵のインド関連史

料の写真撮影が一部許可されたことから、許可された史料の状況整理・写真データの収集を実施した。

(2)

先行の諸科研費課題採択時に収集したり、所在が判明したものを今回の調査研究対象とし、研究代表者の研究機関である九州工業大学のマイクロフィルムスキャナを使用し、研究分担者所有のマイクロフィルムとあわせて電子化を行った。

(3)

本研究の研究成果として、研究課題の柱の一つである女性と子どもについて実証研究を2冊の論文集に掲載し出版した。ここでは研究代表者、研究分担者が個別論文を発表した。さらに、当該史料研究をもとにした実証論文を研究分担者が図書、雑誌論文として公開し、植民都市社会史モノグラフの発表を精力的に行った。

上述書における研究代表者の論文では、17世紀後半から18世紀半ば以前までの「商業」の時代と認識される次期に、居留地を中心として展開した会社の植民都市建設事業を会社史料から実証検討した。19世紀半ば以降のイギリス帝国期のインド都市社会との接合・変容の状況を長期の時間軸で分析するためには、領主としての東インド会社の植民地統治や、植民のエージェントの役割を史料から明らかにすることが不可欠であった。さらに、世界規模の移動が本格的に始まっているこの時代の世界史の文脈に、EICによる女性植民事業のあり方を置くことで、植民地のジェンダー研究において重要な視点である女性の移動の問題を比較史的に検討した。

(4)

今後の課題として、史料論研究を本プロジェクトのメンバー3人を含めさらに拡大した体制で、植民都市の社会史についての基盤Bの研究課題を準備中である、特に、研究代表者は東インド会社末期の植民事業の問題を実証的に論じていくために、本事業の研究成果として得られた手法を援用しながら、さらに発展させていくことを企図している。

(5)

今後の議論の焦点として、ここで柱となった「教育」「言語」「女性」「法と慣習」の問題をさらに進め、植民都市社会が形成されるプロセスにおける人々の役割について、具体的に実証することを上述の課題から検討している。

これまでのイギリス帝国史研究の動向から、植民地の公共圏で支配的な位置を占めたのは、地位と経済力のある白人の成人男性であったことは明らかである。植民地の都市ではこの事実を前提として政治史、経済史を中心に歴史が書かれてきたが、それを前提とするよりもむしろ、白人の成人男性の分類と役割を整理しながら、それ自体の歴史を問いなおすことが社会史的アプローチにとって重要な意味を持つ。

(6)

研究成果の一つであるカピル・ラジの翻訳書を生み出す過程で明らかになったことは、思想史的な史料の利用が上記の研究目的にとっての有効性であった。特に現地へ赴いた東インド会社関係者、司法関係者の書簡やメモワールは、当時の植民都市社会にイギリス人たちが抱いた理想や誤解、価値観が著されており、これらを会社史料や公的な文書と合わせて読むことの重要性が改めて確認できた。今後は植民都市社会史の史料としての思想史的な史料の利用を、より進めていくことが課題として浮かび上がった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

和田郁子「港町マドラスにみる境界 17世紀クリスチャン・タウンと「ポルトガル人」」『境界研究』7号、2017年、pp.25-44、査読有。

和田郁子「『アーイーニ・アクバリー訳注(5)』」『神戸大学文学部紀要』44号、2017年、pp.49-88、査読無。

水谷智「混血から見た帝国形成 世界史的視座の確立に向けた展望と課題」『文化人類学研究』17号、2016年、pp.58-65、査読無。

和田郁子「『アーイーニ・アクバリー訳注(4)』」『神戸大学文学部紀要』43号、2016年、pp.35-73、査読無。

和田郁子「ナーガパッティナムの『2つの町』」『西南アジア研究』83巻、2015年、pp.55-66、査読有。

Satoshi Mizutani, 'Hybridity and History', *Ab Imperio*, 2013/4, 2014, pp.27-47. 査読有。

[学会発表](計9件)

和田郁子「コロマンデル海岸の所謂「ポルトガル人」と草創期のマドラス 「境界」の視点から」第77回羽田記念館定例講演会、2016年12月17日、京都大学(京都府、京都市) 招待講演。

Ikuko Wada, 'Early Modern Port Cities as Hubs for Inland and Overseas Trade', *KuSuWs-2016*, 21 March, 2016 (Gangtok, India).

和田郁子「近世インド港町の「オランダ人社会」に生きた女性たち」白眉シンポジウム、2016年1月15日、京都大学(京都府、京都市)。

Satoshi Mizutani, 'The Emergence of "Semi-Educated Natives"', *The 4th International Congress of Bengal Studies*, 13th December, 2015, Tokyo University of Foreign Studies (Tokyo, Fuchu-shi).

和田郁子「前近代インドにみる「越境」の

男女関係」前近代ユーラシアにおけるフロンティアとトランスフロンティア研究会、2015年5月22日、京都大学（京都府、京都市）。

和田郁子「港町における市壁の建設」近代移行期の港市と内陸後背地の関係に見る自然・世界・社会観の変容研究会、2015年1月10日、九州大学(福岡県、福岡市)。

Ikuko Wada, 'Embracing or Segregating?', Early Modern Seminar Series, 10 November 2014 (Groningen, Netherland).

和田郁子「港町と市壁 近世コロマンデル海岸における事例から」前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討研究会、2014年7月12日、東京外国語大学(東京都、府中市)。

Satoshi Mizutani, 'Child Removal under the British Raj', the 16th Berkshire Conference on the History of Women, 22 May 2014 (Tronto, Canada).

〔図書〕(計7件)

和田郁子他著『他者との邂逅は何をもたらすのか』昭和堂、2017年、192頁。

カピル・ラジ著、水谷智、水井万里子他訳『近代科学のリロケーション』名古屋大学出版会、2016年、316頁。

水谷智他著『人権神話を解体する3』東京大学出版会、2016年、384頁。

水井万里子、水谷智、和田郁子他著『女性から描く世界史』勉誠出版、2016年、289頁。

水井万里子、水谷智、和田郁子他編著『世界史のなかの女性たち』勉誠出版、2015年、256頁。

和田郁子他著『日蘭関係史をよみとく 下巻』臨川書店、2015年、256頁。

水谷智他著、『現代インド1』東京大学出版会、2015年、392頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水井 万里子 (Mariko MIZUI)
九州工業大学・教養教育院・教授
研究者番号：90336090

(2) 研究分担者

水谷 智 (Satoshi MIZUTANI)
同志社大学・グローバル地域文化学部・教授
研究者番号：90411074

(3) 研究分担者

和田 郁子 (Ikuko WADA)
岡山大学・社会文化科学研究科・特任助教
研究者番号：80600717